

## 論文要旨

### 明治・大正期の文学作品に見るオノマトペの語義変化とその要因 ー和語と漢語の関わりを中心にー

中里 理子

明治・大正期に語義変化を起こしたオノマトペをいくつか取り上げ、小説の用例をもとにその語義変化の実態と要因について考察した。

第1章では、先行研究を三つの観点からまとめた。まず、数多く提唱されたオノマトペの名称の変遷を辿り、音象徴性を中心に、各提唱者のオノマトペに対する捉え方を整理した。次に、日本語の中にある漢語由来のオノマトペに関する先行研究をまとめ、第2・3章で展開する議論の前提を押さえた。先行研究を参考にして、本論文では、漢語に由来するオノマトペを漢語系オノマトペと呼び、本来の和語系オノマトペと対照させながら考察を進める。最後に、オノマトペの意味、特に多義語に関する先行研究をまとめた。本論文では従来研究されてきたオノマトペ一般の意味研究ではなく、個別のオノマトペの語義研究を中心に据え、周辺語彙との関係から語義変化を考察する立場に立つ。

第2章では、明治・大正期に現代語と異なる意味で使われたオノマトペを取り上げ、周辺にあるオノマトペと対照させながら意味領域を分け合って語義変化する実態をまとめた。多義であった「まじまじ」は、音韻面で隣接する「もじもじ」に「落ち着かない様子」の語義を任せ、形態面で隣接する「まんじり」に「眠れない様子」の語義を任せた結果、「まじまじ」自体は「見つめる様子」に限定されていった。意味領域が広がった「わくわく」は、類義語「どきどき」との関連からプラスの意味に限定されるようになり、「うきうき」との関連から対象が未来に限定され、「わなわな」との関連から「震え」という身体的意味を失った。その結果、「未来の出来事に対して期待する」というプラスの感情を表す意味に限定された。江戸期に類義語であった「うっとり」「うっかり」は、二語と語義の重なった漢語の「茫然」と和語の「ぼんやり」との関連から、「放心状態」の意味を「茫然」「ぼんやり」に譲り、さらに形態面で隣接する「うとうと」「うかうか」の影響から、「うっとり」がプラスの意味に、「うっかり」がマイナスの意味に分化する過程を辿った。第2章で見た語義変化に共通するのは、明治30~40年代に起こったこと、意味を縮小して曖昧さを排除することの2点である。この語義変化の要因が明治・大正期の小説作品の語彙と表現のあり方に関わることを仮定し、語彙については第3章で、表現については第4章で考察した。

第3章では語義変化の要因として、明治・大正期に小説の語彙が漢語から和語へと移り変わるさまを考察した。『浮雲』をはじめ前期の作品は、心情表現の和語の不足と、和語系オノマトペの語形が発達していなかったことから、漢語系オノマトペを多用して補い、さらに和語のふりがなに何種類かの漢語を

当てて意味の使い分けをしていた。後期の小説は、前期よりも和語系オノマトペの割合が増えて漢語系オノマトペの割合が減り、和語に漢語・漢字を当てる割合が減ることから、俗語である和語系オノマトペが抵抗感なく使われ、漢語の助けを借りずに小説の言葉として認められたと考えられる。さらに当時の和語と漢語の関わりを見るために、静寂を表す「しんと」「しんしん」「ひっそり」、沈黙を表す「默然」「むつつり」を取り上げてそれぞれの影響を考察した。漢語の「しんしん」は江戸から明治にかけて静寂の意味を広く表していたが、和語の「しんと」が明治 20 年代以降は静寂の意味を担うようになり、もともとあった和語「ひっそり」と意味領域を分け合って共存した。「默然」は、明治 30 年代以降に小説の言語が和語へと移り変わるのに伴い、「むつつり」へと使用が入れ替わった。明治後期の小説では、和語系オノマトペが漢語から独立し多用されたために、多義であった和語は周辺語彙との意味領域を分け合った。オノマトペも意味を縮小し限定する方向へと語義変化し、類義語との違いが明確になった。

第 4 章では、語義変化の要因に、文章の近代化が関わることを考察した。「泣く・涙」「笑い」に関する表現を取り上げ、中古から近代にかけて使用されたオノマトペとそれ以外の描写を分析した結果、オノマトペは写実的な擬音語が発達し、その一方でオノマトペ以外の表現ではより正確で細かい描写が発達していったことが認められた。これは、表現がより正確で細密になされた近代的文章のあり方と重なっており、正確な描写を行うために和語つまりオノマトペについても語義の曖昧さを排除し、意味を縮小する必要があった。

以上のことから、明治・大正期の小説作品に見られるオノマトペの語義変化の要因は、近代の小説の語彙と文章のあり方に関わっており、漢語に替わって和語が多用されることに伴い意味を縮小して語義の曖昧さを排除したこと、正確な描写を目指すことに伴い意味を縮小して語義の曖昧さを排除したこと、の二点にまとめられる。